「日々の理科」（第 1297 号） 2018（H30),-1,24

「東京の雪（３）」

お茶の水女子大学附属小学校　田中　千尋

正午前後にまとめて降った「雪あられ」で、文京区にも積雪が始まった。最初に積もり始めるのは土や芝のある場所だ。人工的なコンクリートや建造物にはなかなか積もらない。雪粒との接地面積が大きく、熱が伝わりやすいのだろう。

こうなると、３年生の子どもたちはじっとしていられない。私は５時間目に「雪の結晶の観察」をさせることにした。豆電球は待ってくれるが、雪は待ってくれない。雪が優先である。

地上に落ちた雪粒はすぐに融けてしまう。積もった状態の雪では、もはや結晶の観察はできない。雪の結晶の観察は、「降ってきたばかりの一瞬」が勝負なのだ。私は屋外に出す前に、教室で観察のコツと、主な雪の結晶の種類を教えておいた。持ち物は小さな虫めがねだけである。

雪粒は色の濃い布地に受けるのが一番良い。手袋やマフラーでも構わない。黒い画用紙でも代用できる。雪粒を受けて、きれいな結晶の形を見つけたら、素早くルーペで観察する。

これが「雪あられ」の結晶だ。もとは「樹枝六花」という結晶だったものに、氷の粒が付着している。

これはもっと形がはっきりしている。よく見ると、付着した氷も六角形の結晶が多いことに気付く。